

かたつむり日記

昔むかし、二十とんで四人の仕立て屋さんたちがおりまして、みんなそろってカタツムリを殺しに行きました。ところがなんということでしょう、その中でいちばん強い男ですら、カタツムリのしっぽに触れることさえできずじまいでした。なにしろ、カタツムリの野郎が角を出したならば、その姿たるやまるで小さな猛牛のようなのですから！逃げろや逃げろ、仕立て屋さんたち、すぐに皆殺しにされちまいますよ！

1

その年はカタツムリが異常繁殖したおかげで、畑の野菜は台無しになった。あとには、無残に食い散らかされたキャベツのきれっぱしが風に舞っていた。そこで、わたしは野菜の代わりにカタツムリを食べて夏を乗り切ることにした。そう、実際のところ、わたしが所有しているものと言えば、件のカタツムリと、庭の隅に生えている椰子の木（この木は異常に背が高かったのですが、さすがのカタツムリたちも果実にありつく前に木登りを断念してしまったのだった）だけとなっていたのである。

カタツムリをつかまえてくる仕事は、近所に住む子どもに委託した。わたしの同居人であるオカリナは、通りで石蹴り遊びに興じている小汚い少年たちを集めて、一人ひとりに大きなボウルを渡しながらかう命令したものだ。『さあ、うちの庭でわがものの顔をしているでんでん虫たちを集めてきてちょうだい！いっぱい集めてきてくれたら、冷たい椰子の実ジュースをご馳走するわよ！』

カタツムリ採りは少年たちにとってなかなか面白い遊戯だったらしく、彼らは半日ずつと狩猟に明け暮れた。程なくして、大量のカタツムリが捕獲された。

わたしは、そのカタツムリたちを大きなザルの中に収容し、脱走しないよう蓋をした。少年たちは裏庭で車座になって、泥だらけの顔に笑顔を浮かべ椰子の実ジュースを啜っている。さて――と、わたしは低く呟き。あとは気長に待つばかりだな。

強制収容所の中のカタツムリたちは、それから一週間断食を余儀なくさせられた。とにかく、腹の中のものぐすつかりなくなっちまうまで待たなけりやならないのさ、とわたしはオカリナに説明した。連中、何を食ってたかわかったもんじやないからね。うん、とオカリナはうなずく。そして、「腹の中のものぐすつかりなくなっちま」った後、カタツムリたちはバケツに一杯の岩塩の中でその生涯を終えた。

『線路の向こう側』では、生涯を終えた後のカタツムリは一旦殻から追い出され、ニンニクを効かせたバターで炒められ、そしてまたぞろ殻の中に押し込められ、奇妙な窪みが並ぶ大層な容器に盛り付けられて食卓へ並べられる。しかし『線路のこっち側』で生まれ育ったわたしはその複雑怪奇な調理法の詳細を知らなかったので、昔祖母がやっていたように塩茹でにして食べる

ことにした。ちょうどこんな風にカタツムリが大量発生した夏には、祖母は鍋一杯のカタツムリの塩茹でをこしらえたものだった。こうして、わたしとオカリナは日々カタツムリを茹でて食べ、椰子の実ジュースを飲んで暮らした。

2

時たま、わたしの家には隣人たちが遊びに来た。カタツムリが大好物のトランペットもその一人だ。彼はわたしとオカリナがカタツムリを茹で始めるなり、さっそくそのにおいを嗅ぎつけてやって来るのだった。そしてその日食卓に上るカタツムリの半分以上を一人でべろりと平らげてしまう、困った客人であった。

大量の椰子酒ですっかり出来上がったトランペットは、わたしとオカリナが作ったカタツムリ料理を絶賛し、『線路の向こう側』の市場で売ることをしきりにすすめた。これだけ美味しいカタツムリだもの、『線路の向こう側』へ持って行けばとんでもない高値で売れるだろうよ！あんなたち、そろそろ子どもができるんだろ？（とトランペットは、オカリナの膨らみつつある腹を見ながら言った）子どもができたならなんやかんやで金がいるようになる。だから、今のうちにカタツムリを売りに行って金を作っとくべきだよ。うん、なにしろ、庭にいくらでもいるカタツムリを売ってことは、元手ゼロだ、こんなぼろい商売はないよ！——しかし、わたしとオカリナは、トランペットがいくら力説しようとも、肩をすくめて笑っているだけであった。ペットさんは、えらく『線路の向こう側』にご執心なようね！トランペットが上機嫌で帰宅した後、皿を洗いながらオカリナがそう言う。ああ、ペットさんはどれくらい『線路の向こう側』かぶれだからな。わたしはグラスを磨きながらそう答える。でもあんまり『線路の向こう側』の話ばかりしない方がいいだろうに。ここらは、『線路の向こう側』を快く思っていない人間がいっぱいいるんだからね。（事実、トランペットは近所の鼻つまみ者であった）

『線路の向こう側』か、とわたしは呟く。その呟きは、収容所の中を所在なく這い回っているカタツムリの足音にかき消される。

3

去年の夏に心臓を痛めて以来仕事を休んでいる歌手のチューバ嬢は、膨張しきった腹を揺らしながら、ぶどうの葉を手土産に持ってやって来た。

ありがとう、でもなんでまたぶどうの葉をくれるの？とオカリナ。

これをカタツムリに食べさせたら、味がよくなるらしいのよ！とチューバ。オカリナちゃんが最近カタツムリばかり食べてるって聞いたもんだから、持ってきてあげたのよ。

心臓の調子はいかがです？とわたしはチューバに尋ねた。

まあ、いくぶんかマシにはなったけど、そんなによくないわねえ、とチューバ。特に『こつち側』にはロクな医者がいやしないからねえ。でも『向こう側』に手術を受けに行くだけのお金も

体力もないし。でもね、歌手をお休みして、親父がやってる農園を手伝うようになってから、ちよつとは健康になったみたいよ。やっぱり体を動かして労働するのはヘルシーなようね。今日持ってきた葡萄の葉も、その農園から取ってきたやつだよ！

その時、オカリナが椰子酒を樽から出すのに手こずっていることに気づいたわたしは、俺がやるからと言って台所に向かった。そうよ、オカリナちゃんは今身重なんだから無理しないでゆっくりしてた方がいいわよ、とチューバ。わたしと入れ替わりに台所から出てきたオカリナは、最近本当にお腹が重たくて重たくて、と照れたように言いながら椅子に腰掛けた。

何ヶ月ぐらいになるの？とチューバ。五ヶ月よ、とオカリナ。

あたしも体型だけは妊婦さんみたいよね。チューバは威厳溢れる腹を揺らしながら笑う。

その後、チューバはわたしを持ってきた椰子酒に酔いしれ、気まぐれに歌を披露した。今日は特別に歌ってあげるわよ、とえらくもったいぶって歌い始めたわりには、ブランクを感じさせる、ひどい歌声であった。しゃがれきった、調子はずれの歌が家の中に響き渡ると、わたしはやりきれない哀しさを覚えたものだが、これはきつと酔っ払っているせいで無茶苦茶な音程になってしまふのだろう、と考えることにした。(実際のところ、昔のチューバは毎晩酒場で樽一杯の酒を飲みながらも見事な歌を歌っていたことを、わたしは覚えていたのだが)

4

翌日、わたしはさっそく強制収容所の中に葡萄の葉を入れてみた。空腹で人生に絶望しきっていたカタツムリたちは、突如として目の前に出現したご馳走に驚愕し、我先にと食らいついて行った。

その日の夕食、さっそく葡萄の葉入りカタツムリが食卓に供されることとなった。わたしもオカリナも相当に期待しつつフォークを手に取り、ボウルに山と盛られたカタツムリの山に手を伸ばした。しかし・・・・・・なんと言うか、あまり目覚しい味の違いがあるわけでもなく、いつも通りの味であった。なんだ、大したことないじゃないか。私とオカリナは目を見交わして肩をすくめ、そして黙々と食べ続けた。

しかし、やはり葡萄の葉は侮れないツールであった。我々があらかた食事を終えた頃になってやっと、その隠された真価が発揮されたのである。

最初に異変に気づいたのはオカリナだった。彼女は妙な表情を浮かべながら腹の周りを撫で回し、いつもよりも甲高い声で「なんだか変におなかがいっぱいになったわ」と言った。

「食べすぎかい？」とわたし。

「いいえ。もっと、変な感じがするの」

「つわり？」

「いいえ、違うわ」オカリナは首を振った。その途端、彼女の体がふわりと宙に浮き、そのままプカプカと天井まで上って行ってしまった。

わたしは仰天し、「一体どうしたんだ」と尋ねたが、オカリナは首を振るばかり。そうこうするうちに、今度はわたし胃の中に違和感を覚え、たちまちプカプカと天井まで浮かび上がってし

まった。

「どうやら我々は、葡萄の葉を食べたカタツムリを食べると、体内でヘリウムガスが発生する体質のようだな」私はプカプカと浮かびながら、甲高い声でそう言った。「ほら、心なしが僕らの声、甲高いキンキン声になってるだろ？これは、ヘリウムガスを吸った時特有の現象なのさ」

「そんな変な体質なんてあり得るの？」とオカリナ。

「ああ、ありえないことじゃないさ。」とわたし。「聞いた話では、ラテンアメリカには、ホット・チョコレートを飲むと体が浮かび上がる体質の神父さんがいるらしい。彼はその体質を生かして自分を見世物にして、見物人たちから教会建設のための寄付金を集めたんだとさ」

「ふうん」オカリナは気のない返事をした。

ちようどその時、家の中にどやどやと一角獣の群れが入って来た。最近、夕方のこの時間になる腹を空かせた一角獣たちがこの街に大挙して押し寄せて、時にはずうしくも家の中にまで侵入してくるのである。

しまった。今日に限って、勝手口の鍵を開けっ放しにしていたのである。一角獣たちはぞろぞろと列を成して入ってくる。いつもならすぐに追い払うところだが、今の我々は天井に浮かびっぱなしで身動きもとれない有様だ。わたしは懸命に下へ降りようとがきながら（空しい努力だった）一角獣たちに向かって大声で言った。「悪いけど、きみが食べたがってるようなものはいちにはないよ。食べ物といったら、カタツムリと腐りかけの椰子の実しかないんだからね！」

結局一角獣は小一時間ほど台所をかき回っていたが（空しい努力だった）、結局いい餌を発見することはできなかった。彼らは椰子の実の果汁を少し舐めると、またぞろ隊列を組んでどこかへ去って行った。

「ねえ、どうしましょう」最後の一角獣が部屋から出て行くと、オカリナが苦笑いしながら言った。

「まだ病院は開いてたよな」わたしは空中を平泳ぎしながら言った。「ガスを抜いてもらいに行こう」

そのようなわけで我々は注意深く低空飛行しながら、町外れの病院に向かった。

病院の医者はやぶで有名だったが、ガス抜きの手際は鮮やかだった。彼はわたしとオカリナに奇妙なチューブ状の器具をくわえさせると、我々の体内に充滿しているヘリウムをあつと言う間に吸い取ってしまった。この治療だけは得意なのさ、と彼はまんざらでもなさげに語っていた。

村祭が近づいていた。

村祭は、村外れのあばら家に住むムラノカミを祭る行事である。ムラノカミは頭は猿、胴体は狸、手足は虎、尾は蛇のよく素性の知れない動物で、いつ頃からこの『線路のこっち側』で生きているのか、そして一体その正体が何であるのかは、謎に包まれている。かつてはヒョーヒョーという鳥のような不吉な鳴き声を発しつつ夜の街を徘徊し、天候を自在に操って雷鳴をとどろかせたり、時の権力者に取り憑いて呪い殺したりしていたのだそうだが、今では霊力が衰えてしま

ったのか、そうした恐ろしい呪術を使うことも少なくなり、ただあばら屋の中で細々と生きていくばかりである。ところで聞いた話だが、『線路の向こう側』にも昔はマチノカミという同種の祟り神が住んでいたそうだが、もうその信仰が耐えて久しく、今ではその存在を記憶している者すら少ないのだとか。

村祭の前には、ムラノカミに供物を奉納しに行く決まりとなっている。今や、この決まりを律儀に遵守している住民もすっかり少なくなってしまった。わたしも人のことは言えない、去年までは真面目に奉納などしていなかった。しかし今年はなんと言ってもオカリナが身重であり、安産祈願のためにもきちんと供え物をしに行っておいた方がいいだろう。というわけで、私は大きな椰子の実を二つと、カゴ一杯のカタツムリを担いで村はずれのあばら家に向かったのである。

ムラノカミはあばら家の奥に設置された寝台の上に身を横たえていた。わたしが扉を開き、拍手を打つと、まず彼の尾である蛇がそれに反応して目を覚ました。蛇は鎌首をもたげて後頭部を突き、それで頭部の猿も目を覚ました。そしてムラノカミは寝台の上に起き上がり「なんだ。供物を持ってきたのか」と少ししゃがれた声で言った。

わたしが頷くと、ムラノカミは「その上に置いてくれ」と言い、寝台の横に設置された巨大な杯を指差した（その指先には、虎の鋭い爪が生えていた）。杯の上にはすでに西瓜だの葡萄だの、他の住民が持ってきたと思われる供物も積まれていた。

寝台の下には、足を怪我した一角獣が何頭も横たわっていた。「不憫なものよ」と言いながらムラノカミはそのうちの一頭をつまみ上げ、頭から食べ始めた。

「最近、相当な数の一角獣がこの村に流入して来ているだろう」

ムラノカミが言うことには、『線路の向こう側』の連中が一年前この付近の山を住宅建設のために乱開発したせいで、そこにずっと住んでいた大勢の一角獣たちが餌場を失ってしまい、仕方がないので一角獣たちは里へ降りて来て、餌を求めてそこら中をうろつくようになってしまったのだと言う。

「山を切りひらいちまったおかげで、とうとうヤマノカミもいなくなってしまった。マチノカミを追放した時とおんなじだ。蹂躪し、蔑み、そして知らんぷりする。それが奴等のやり口さ。」注意深く骨を噛み砕きながら、ムラノカミは言う。「おまけに奴等の目には、この一角獣たちが見えないときた。何にも見えてやしないんだ、あいつらと来たら何にも見えてやしないんだからな」

ムラノカミが一頭の一角獣を食べ終える頃、残った一角獣たちは互いに共食いを始めていた。

「この有様だ！」ムラノカミはうんざりした声で言う。そして、奇妙な甲高い声でヒョーヒョーと鳴いた。

そして、村祭の日がやって来た。朝から空一面を重たげな雲が覆い尽くしていて、雷鳴が轟いていた。ムラノカミが老体を鞭打って空を飛び回り、久々に力を発揮しているらしかった。ヒョーヒョーという不吉な鳴き声が響き渡り、空に亀裂が入ったかのような稲光が瞬く。お祭りだ、

とわたしは呟いた。

祭と言っても、さして派手なものではない。昔はもつと盛大にやったらしいが、今では夕方頃から食べ物を持ち寄って晩餐会を開き、その後酒を飲みながらちよつとしたダンスパーティーを行う、というごくごくシンプルなものになっている。わたしは朝から鍋一杯のカタツムリを茹で、それを持ってオカリナといっしょにチューバ嬢の家へ向かった。今年の晩餐会は、チューバ嬢の家で行うことになっていたのである。

祭に参加する人は年々減ってきている。今年は十六人だった。おそらく、わたしとオカリナの子どもが大人になる前に、この催し物の伝統は絶えてしまうだろう。そうすれば、ムラノカミはどこかへ行ってしまふだろう。マチノカミやヤマノカミがいつの間にか追放されてしまったように。

チューバは昔ステージで着ていたお気に入りの衣装……カラフルなひだと宝石（のように綺麗なガラス細工）で飾り付けられた、形容しがたい趣味のドレス……を着て、アイシャドーと口紅と白粉を塗りたいく、つけまつげと巨大なカツラを装着していた。相当に気合を入れているな、とわたしとオカリナは顔を見合せて苦笑いした。それはそれは相当な気合であった。なにしろ昔の衣装を着るには今の彼女の腹は度を越して立派すぎるので、彼女はコルセットでもって自らの体を締め上げているのだった（晩餐会が終るまでに窒息死してしまうのか、若干不安だった）。そして顔に目立つ小皺の間に白粉が入り込み、アイシャドーと口紅の大量使用は道化師のメーキアップを思わせた。カツラに関しては最早何も語れない。わたしのボキヤブラリーではどうして太刀打ちできないカツラである。なんでも、虎の髭を使用したインド産のカツラなのとか。またたくまに、テーブルの上はみんなが持ち寄った料理でいっぱいになった。そして、特に乾杯の音頭などとられることもないままに食事が始まった。こと、全員の注目を集めたのは、水車小屋に住むオカマのハモニカが持ってきたセロリだった。スティック状に切った生のセロリをマヨネーズにつけて食べるという、これ以上ないほどシンプルな一品だったが、本当に美味しかった。

「なんか今年は作物の出来が悪かったのよオ。他の野菜はサツパリできなかったんだけどオ、セロリだけはできたのよねエ」ハモニカは彼特有のオカマ声でそう説明した。「もう、セロリばかり出来てさア。どうしてかしらねエ。トマトやなんか、萎れて縮んでまるで梅干みみたいな有様だったのにイ。」

「こんなうまいセロリが出来ただけマシさ」と私。「うちの畑なんか、カタツムリのおかげで野菜類は全滅だからな」

「で、これが件のカタツムリってわけね」とチューバ嬢がわたしたちの持参したエスカルゴ料理を摘み上げながら言い、一同は笑った。

晩餐会で最も強く心に残ったというか、わたしとオカリナの心に深く影を投げかけたのは、『線路の向こう側』かぶれのトランペットの言葉だった。

彼はオカリナにこう問いかけた。「子どもさんは、どこの学校に通わせるつもりだね」

オカリナは微笑んで答えた。「さあ……まだ色々、考えてる最中です」

トランペットは頭をブルンブルンと振った。「悠長に構えてはいいけないよ。そういうことは

さつさと決めないと。もう今までみたいに我々が呑気に生きていける時代じゃないんだ。子どもの教育は、早いうちからきっちり計画を立てておくものだよ」

「どこの学校へやるのがいいですかね」とわたし聞いた。

「そりやもう、『線路の向こう側』の学校に決まってるじゃないか！」目を輝かせてトランペットは叫び、他のみんなは「やれやれ、またやつこさんの病気が始まった」と言いたげに苦笑いをもらして互いの顔を見合ったのだが、トランペットは構わずに続けた。「できるだけ早いうちに、あっちの共同体に入っておいた方がいいって」

『「こっち側」の共同体ではないんですか?』とオカリナが問うた。

「話にならんよ！」トランペットは憤った。「子どもさんの将来を考えるんだったら、『向こう側』の教育を受けさせ、『向こう側』の文化の中で成長させ、『向こう側』で人脈を築かせ、『向こう側』の人間として生きていかせるのが一番だよ！そんな、こんな『こっち側』みたいな所で生まれ育つても、しけた人生が待っているだけだよ。うちの息子だって、今では『向こう側』で働いているが、そりやもうえらい出世ぶりなんだからね。『こっち側』には行き止まりしかない。それにひきかえ、『向こう側』には、成功への切符がそこら中に転がっているんだからな！」

空気がすっかり冷え切ってしまった。静まり返った部屋の中に、トランペットの熱の竈った演説が朗々と響いていた。オカリナは顔を伏せて、黙々とセロリを齧っていた。

やがて、酒が回って来た出席者たちは次々と席を立ち、自然発生的にダンパが始まった。わたしも久々に踊りたかったのだが、オカリナは身重で踊れないので、彼女を連れて帰宅することにした。オカリナは「私は一人で帰るから、ダンパに参加していいよ」と言ってくれたのだが、そうはいかない。

「あいつ（トランペット）はキチガイなんだから気にすることはないわよ」帰りの挨拶をした時、チューバ嬢はそう言った。「何が『線路の向こう側』よ！あんなところはクソの山よ」

しかしわたしは、『向こう側』に居さえすれば人生安泰だと安直に考えるトランペットも、『向こう側』に対してとにかく冷笑的な態度をとろうとする彼以外の人々も、どちらにも賛成でかかぬな、と感じていた。そしてどうすれば一番子どものためになるのか、わかりかねていた。私やオカリナのように、『線路のこっち側』の人間として生きていく方が幸せなのか、はたまた『線路の向こう側』へ行き、その人間として生きていく方が幸せなのか。

——わからなかった。

懐かしい歌の旋律を奏でる笛の音と、少しずれ気味の太鼓の音が響いてきた。ムラノカミはもう天から舞い降りたようで、雲が消え去り綺麗な満月が顔を見せていた。その下で、ほろ酔いの村人たちが踊り続けていた。

7

秋が来た。

秋が来たというのは、空の色でわかるものだ。夏空と秋空には歴然とした違いがある。わたし

は秋空が好きだ。人は秋空を見上げると悲しくなるといふけれど、わたしは夏空の方がよほど悲しいと思う。どこまでも澄んだ青色で、その青色を見ているとまるで時間が停止しているかのような気分になるし、山の端には、もうすぐ雨と雷になりそうな真っ白い入道雲が立ち上っている。夏になると思い知らされるのである、自分がどれほど多くのものをなくしてしまったかということを。

秋空には奇妙な色がついている、と思う。ほとんど感知できないほどに薄いセピア色、それが秋の太陽光線が孕んだ色使いであると思うのだ。その色の存在に何かの拍子に気づいた時、わたしはしみじみと思うのだ、「もう秋だなあ」と。

しかし残念ながら、今年の秋はそれを感じることができない。なぜならば、空一面に七面鳥の大群が浮かんでいて、これがまるで分厚い雲のように太陽の光を遮っているからだ。

わたしは線路端に立って、間拔けな顔つきのままでそんな空を眺めていた。先日のわたしたちのように、あの七面鳥たちもヘリウム病に侵されてしまったのだらうか。

空の色の変化はついぞわからなかったが、他に目に見える変化があった。トランペット氏ご自慢の息子さんが、とうとう文無しになって『線路のこっち側』に戻って来たのである。トランペットの口ぶりから、わたしはその息子を精悍で堂々とした若者なのだと馬鹿正直に信じていたのだが、実際は萎びたセロリのような、飢餓状態のニワトリのような、そんな雰囲気の方であった。

後にわかったのだが、トランペットは「息子は、『向こう側』で青年事業家として大活躍している」と吹聴して回っていたのだが、実際のところは彼の息子は日雇いのバイトで食いつなぐのが精一杯で、住むところもなく路上で暮らしていたのだと言う。それどころか、他の路上生活者たちからは「余所者」として疎まれ、散々な扱いを受けていたのだという。

「当たり前よ！」チューバ嬢は、毒々しい口紅を塗った唇を思いつき広げて大笑いした。「だいたい『こっち側』の人間が『向こう側』に行ったところで、人間らしい生活をさせてもらえるはずがないじゃないの！ケツを蹴っ飛ばされて、ドブに叩き込まれるのがオチよ！」どうも彼女は年を負うごとに、言葉遣いがワイルドになっているようである。

それからしばらくの間、トランペットの息子は生気を失ったような顔のままで仕事もせずにごらぶらしていたが、いつの間にか姿を消していた。蒸発したかどうか、精神病院に入れられたとか、様々な噂が乱れ飛んだが、結局のところ彼がどうなったのかは誰も知らない。

そして、トランペットがわたしの家に夕食を食べに来ることもなくなってしまった。

8

やがて冬が来た。

木枯らしが街路を駆け抜ける頃には、七面鳥たちは空からすっかり姿を消してしまった。

消えた七面鳥はどこに行ってしまったのかと言うと、わたしたちの胃袋の中である。十二月下旬のある日、体内のヘリウムガスがつかいになくなってしまった七面鳥たちは、次々と地上に落下していった。わたしたちは、町中に散らばっている七面鳥の死体をめいめいの家に持ち帰った。そしてクリスマスの夜に、それを食卓に供したのだった。

わたしもオープンで七面鳥の丸焼きをこしらえた。付け合せは、もちろんカタツムリである。わたしとオカリナは冷蔵庫の中に残っていたカタツムリを洗いざらい全部鍋に放り込み、塩茹でにした。それはそれは素敵なクリスマススのデイナーだった。

カタツムリがすっかりなくなった冷蔵庫の中は、サン・デクジュペリの『星の王子様』のラスト近くに出てくる閑散とした砂漠の情景を思わせた。王子は砂漠の真ん中に静かに倒れ、そして帰っていったのだ。

わたしは、そっと冷蔵庫の扉を閉めた。

七面鳥にかわって、今度はブリの群れが空を覆い尽くすようになった。ブリは海を泳ぎまわるように空を泳ぎまわっていた。わたしは釣竿を持って表へ出て、空に向かって釣り糸を投げた。そうすれば、面白いほど容易にブリを釣り上げる（釣り下げる？）ことができるのだった。これはオカマのハモニカが発見して広めた漁法で、夕暮れ時、そろそろ夕飯の材料を調達しなければならなくなる頃になると、誰もが釣竿を背負って家から出てきて、空に向かって一本釣りを試みるのだった。

わたしとオカリナは、ブリと大根を使って鍋一杯のブリ大根を作った。大根は、チューバの親父さんがわたしたちの出産祝いにくれたのだった。彼は「何でも、好きな野菜を持って行ってくれ！」と鷹揚に言ってくれたので、わたしとオカリナは、台所に溢れかえっているブリに最もよく合う野菜、大根を所望したのだった。

わたしたちの子どもは、まだ大根を食べることはできない。オカリナのお乳が、彼のご馳走である。まだ生まれて間もないその小さないきものは、母親の胸に顔を埋め、静かに寝息を立てている。ひしめき合うブリの間を縫って雪が舞い落ちていたある夜、彼はやっとわたしたちの世界にやって来てくれたのだった。

わたしは夕暮れ時になると、彼を乳母車に乗せて散歩に出る。空を見上げれば、ブリだらけである。家々の屋根は雪で白く染まり、砂糖菓子のような外観。そして、木々は枯れた腕を冷気の中に差し伸べている。彼は、寒さのせいで風邪をひかぬようにとオカリナが用意した毛布と毛糸の洋服にくるまって、目の前に広がる大きな世界を食い入るように眺めたり、小さな寝息を立てながら夢の中で遊んでいたりする。わたしはゆっくりと乳母車を押しながら、線路沿いをてくてくと歩いてゆく。時折立ち止まり、空を見上げる。ブリたちが、縦横無尽に泳ぎまわっている。吹き付けてくる木枯らしが痛い。

取りあえず、早くこの子に春を見せてやりたい。生まれたばかりの彼はまだ、春すらも知らないのだ。家々の屋根からは雪が消え去り、もはやわびしい砂糖菓子ではなくなり、そして木々は老人から若者へと変貌を遂げ、新しい芽をつけた逞しい腕を空に向かって伸ばしている、そんな素敵な季節。何よりも先にわたしはまず、彼に春について教えてやりたい。今はただ、そう思っている。

